

四、聞其名号

「諸有衆生、聞其名号、信心歡喜・・・」

「諸有の衆生、其の名号を聞いて信心歡喜し・・・」如来は、諸有の衆生に対して、阿弥陀仏の名号を聞けと説きたまうのである。一切衆生の救われる道は、名号を聞いて信ずる以外には有り得ないが故である。まことに一切衆生は、如来の名号を聞信してのみ、救われ、自覚して、往生浄土の志願を全うするのである。重ねて言う、名号を聞く以外に自覚も救済も有り得ない。

しかるに、今、子細にこの成就文に注意すれば、名号の上には「其の名号」と、「其」の一字が加えられている。この一字、何を意味するのであろうか。しかるに、經文を注意すれば、大經下巻の卷頭は次の如くに説かれてある。

恒沙の諸仏

『無量壽經下巻』の最初には、

「仏、阿難に告げたまわく、其れ衆生有りて、彼の国に生ずる者は、皆悉く正定之聚に住す。所以は如何ん。彼の仏国の中には諸の邪聚及び不定聚なければなり」と。

これ釈尊が、先ず阿難にむかつて、いわゆる第十一願成就文を説きたまえるものである。即ち、如来の本願に生きる衆生はこの世に於いて正定聚に住し、彼岸に到つて滅度の仏果を得ざれば、正覺を成ぜずとの第十一願文に対して、ここに其の成就を示され、彼の浄土界中には、邪定聚(十九願の衆生)不定聚(二十願の衆生)なきことを示して、「其れ衆生有りて、彼の国に生ずる者は、皆悉く正定之聚に住す」と、念仏行者は正定聚に住すとの信心の利益を示したまうものである。次いで、

「十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量壽仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。」

と説かれてある。これ即ち第十七願成就の文であつて、法蔵菩薩は、四十八願中、第十七願に於いて、

「設い我仏を得んに、十方世界の無量諸仏、悉く咨嗟して我が名を称せずば、正覺を取らじ。」

と、お誓いなされた。これ法蔵の正覺は、十方恒沙無量諸仏の上に仏の名号、称揚讚嘆されることによつて、初めて成就することを示されたものである。ここに於いて、恒沙の諸仏は、悉く南無阿弥陀仏の名号に生かされ、名号を讚嘆することによつて、尽十方無碍光如来の輝きを顕現せしめ、それによつて無碍光如来の分身、眷属となりたまうのである。恒沙の諸仏は即ち弥陀であり、弥陀即諸仏である。これ即ち十七願の世界である。今釈尊は、弥陀の現在の相を説かるるに當つて、その本願成就の相を、

「十方恒沙の諸仏如来は、皆共に無量壽仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。」と説かれたのである。

浄土の華光仏

さかのぼつて『大經上巻』の終りには、浄土の莊嚴相を説ける中に「衆宝蓮華」が説かれてある。經に言く、

「又衆宝蓮華、世界に周滿せり。一々の宝華、百千億の葉あり。」

浄土は功德莊嚴の蓮華によつて周く滿たされている。その一々の宝華には百千億の葉がある。

「その華の光明、無量種の色あり、青色には青光、白色には白光、玄黄、朱紫の光色も亦然り。曄曄煥爛にして日月よりも明曜なり。」

華からは光が出る。華には無量種の色があるが、青色には青光、白色には白光、その他、玄、黄、朱、紫、等々の光や色も、悉く然りである。その曄曄、即ち「ひかり、かがやき」は煥爛、さかんに輝きわたって、日月よりも明らかである。しかるに、

「一々の華の中より三十六百千億の光を出す。一々の光の中より三十六百千億の仏を出す。」

一々の華から三十六百千億の光が出る。その華光一々の中より、又、三十六百千億の仏を出す。この華光仏は、

「身色紫金にして相好殊特なり。一々の諸仏、又百千の光明を放ち、普く十方の為に微妙の法を説きたまう。是の如きの諸仏、各々無量の衆生を仏の正道に安立せしむ。」

華光仏は身色は美しく、その相好はその尊き莊嚴殊特にして他にくらぶべきなく、その一々の仏は百千の光明を放ち、普く十方衆生の為に微妙の法を説きたまうのである。かくの如き諸仏は、各々十方微塵世界に於いて、一切衆生をして仏の正道に安立せしめたまうのである。

以上の説は、如来の本願力によって成就されたる浄土の莊嚴は、そのまま光に輝き、その光は更に華光仏を生み、華光より出づる化仏は、十方世界に於いて衆生を救うて、仏の正道に安心立命せしめると言うのである。これ、十方恒沙の諸仏の何たるかを語るものでなくてはならない。即ち、浄土に於ける華光仏は、そのまま他方に於いては、十方世界の無量の諸仏であり、十方恒沙の諸仏とは浄土の華光仏ではないか。

この華光仏、即ち十方恒沙の諸仏如来は、浄土界中の百宝蓮華より生れたるものである。蓮華こそは如来正覚の全てを表象されたものであるが故に、この諸仏は畢竟、本仏弥陀の正覚より化生せるものである。それなるが故に、十方微塵世界に於いて教主世尊となり、名号を説いて一切衆生を正道に安立せしめたまうのである。

其名号

十八願成就文に於いて「諸有衆生、其の名号を聞いて、信心歡喜し……」と説かれるに先だつて、「十方恒沙の諸仏如来は、皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。」と、第十七願成就文を出されたことは、まことに意味深いことである。

即ち「聞其名号」の「其」とは、名号をして、ただ単なる無内容の名号に非ず、抽象、無味乾燥なる名号に非ずして、十方恒沙の諸仏の上に今現に生き、諸仏の生命となり、諸仏をして諸仏たらしめ、それによつて諸仏に讚嘆せられる所の、具体全一なる名号、弥陀即諸仏、諸仏即弥陀を全うする所の「その」名号を聞け、と仰せられるのである。

釈迦牟尼世尊も亦、その名号に生き、名号に乗托したまうのである。その釈尊の血であり、肉であり、生命である所の名号を説きたまうのである。これ世尊の出世の本懐である。

先に、その名号ということについて聖意をうかがつて来た。名号は単なる抽象的な名号ではなくて、十方恒沙の諸仏如来によつて咨嗟讚嘆せられ、諸仏をして諸仏たらしめる所の、諸仏の生命である所の「その名号」のことであつた。

まことに恒沙の諸仏如来は、本仏弥陀の本願海に誕生して名号を称揚し、それによつて諸仏となり、本仏弥陀は、その諸仏の称名を通してその本願を名告るのである。かくて弥陀即

諸仏、諸仏即弥陀の世界において、名号は法界に具体的となるのである。これ聖人が、名号成就を、第十七願諸仏咨嗟之願の上に見られた所以であった。

この見解に立てば、釈尊も亦、かかる三世諸仏中の一仏である。故に名号に乗托し、名号に生き、名号を説きたまうべきである。これ即ち、無量寿経を説くを以つて、その出世の本懐となしたまう所以である。しかるに、我等の現実界には、釈尊に次いで印度に竜樹、天親の二菩薩出世したまい、共に念仏を以てその生命とし、弥陀の本願に生きられた。支那に於いて、曇鸞、道綽、善導、日本に於いて、源信、法然、親鸞と出世遊ばしたが、諸聖を一貫するものも亦名号であった。

我等の信心を通して領解すれば、名号は諸仏の上に具体的であるばかりではない。実に我等の前に立ちたまう一切の教主善知識において具体的である。名号を聞いて信心歡喜するとは、空疎なる概念や、理論や真理を聞くのでなくて、まことに教主善知識の人格の本質である所の名号を聞くのである。浄土教とは実にこのことである。我に先立つて、如来に救われ、如来に生き輝きたまう方があり、その念仏の聖人が、我にとつて単なる偉人聖者でもなく、あるいは修道の好模範でもなく、全く我に本仏の聖なるみ旨を伝えたまう応現の人である。慈父であり、師父であり、本師であり、善知識である。慈父であり善知識であるとは、我に於いて必然の存在であり、絶対の存在であることである。言う心は「この人なかりせば、我のこの念仏の生涯なし」との、同心一体の存在のことである。同一念仏の世界において父子一体の自覚を持つことである。真に浄土教とはこのことである。

多くの求道者がその長き年月を聞法に費やしつづ、ついに若存若亡の世界を出で得ないのは、信心が本仏の本願力によつて成就されることを知つて、名号を、名号と一体なる教主善知識によつて聞くべきを知らず、せつかくの大法をもついに話とするが故である。「如来は有ると思いません。」の程度を出ないのは、桜に即して春を求めず、直に信心成就しようとするが為である。教えに対して絶対帰依なくしてどうして信心成就しようぞ。

本師知識

すでに二河白道に説かれたるが如く、彼岸には教主あり、現実此岸には教主善知識あつて、はじめて行者の往相は可能なのである。教主はあくまで教主であつて、救主ではない。救主はあくまで救主であつて、教主ではない。本願によつて度したまうものは、あくまで本仏弥陀ではある。しかし、であるが故に、教主を教主とせずして之を軽んじ、直ちに「弥陀と直の約束」などせんとするものは、弥陀の悲懐に撰取されることは出来ない。教主の教説によらずして、信心成就せんとするが如きは独断に陥り、独覚となるが故である。これ信心歡喜が「聞其名号」によつてのみ生れる所以である。教えは人格と合致して我が上に迫る時のみ、絶対の権威を持つ。教えにして絶対の権威をもつが故に、我が心内に迫つて、壊すべきを壊し、成就すべきを成就して、無我の大信を成就するのである。

されば、天親菩薩は、その自督の信を告白せられるに當つて、先ず「世尊、我は一心に」と、教主釈迦牟尼世尊の名をよびたまうたのである。曇鸞大師は、天親のこの「世尊」と告げられたる真意を説いて、

「此の言う意は、釈迦如来に帰したてまつるなり。何を以て知ることを得とならば、下の句に、我依修多羅といえり。天親菩薩、釈迦如来の像法の中に在まして、釈迦如来の經教に順う。この故に願生す。願生するに宗あり。故に知んぬ。此の言は釈迦に帰したてまつるなり。若し、この意を謂うに遍く諸仏に告ぐるも、亦復嫌うことなし。夫れ菩薩の仏(教主世

尊のこと)に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静己に非ず、出沒必ず由あるが如し。恩を知り、徳を報ず……。」
と述べられた。これ菩薩が、教主世尊に対して私なく、忠臣のその君に対するが如く、動静出沒、行住坐臥、教えの如く生きんとする、無我の態度を説かれたものである。やがて我が聖人が、歎異抄第二章において「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり云々」と告白せられた所以である。

聖人は決して、人間法然に値われたのではない。単なる聖者に会われたのではない。ましてや、学者法然を崇仰せられたのではない。まことに念仏の聖人に値い、念仏を説かれるを聞かれて、己も亦、その念仏の教えに救われたもうたのである。「其の名号聞いて信心歡喜」せられたのである。

この故に『涅槃經』に言く、

「復二種あり、一には道有ることを信ず、二には得者を信ず。是の人の信心は、唯、道有ることを信じて、都て、得道之人有ることを信ぜず、是を名づけて信不具足と為す」と。

『華嚴經』に言く、

「汝、善知識を念ずるに我を生ずること父母の如し、我を養うこと乳母の如し」と。善導の『般舟讚』に曰く、

「何してか、今日宝国に至ることを期せん。實に是れ娑婆本師の力なり、若し本師知識の勧めに非ずば弥陀の浄土、云何してか入らん、浄土に生を得て慈恩を報ぜよ」と。(以上化土巻引用)

諸有衆生

御開山聖人は、叡山において既に聖道の行じ難きを知り、何れの行も及び難きを知りたもうたことではあった。けれどもその胸中の自力が粉碎せられ、根本無明が打ち破られて名号を聞信すると共に、煩惱生死の衆生に、地獄一定の凡夫になりきりたまひしは、法然上人に値いたまひし時であらねばならない。

我等は口癖の如く凡夫であると言う。しかし果して救われ難き凡夫であり、衆生であろうか。我等の心的事実を反省する時、如来本願に救われる以前は、人生は決して生死界ではなかつた。六道輪廻の迷界ではない。我も亦、決して、仏でもなく、菩薩でもなく、諸有の衆生でもなかつた。

教主は、名号の利劍を以て、我等が久遠の癰腫を切開したまうのである。自力我執の根本無明を亡ぼし、内に如実の信心の眼を開かれる時、人生は無常火宅の生死界となり、我自体は無有出離之縁の凡夫となり、それ故に浄土や、如来を信知し得るのである。世尊は「諸有の衆生」とよびたまうてある。されど諸有の衆生は、高慢にも諸有の衆生ではない。各々その独賢に閉じこもつて、迷妄を迷妄と知らずして輪廻するのである。しかるに、名号の利劍一度ものを言うや、そこには「諸有の衆生」の正体が現われ、如来に返すべきものを悉く如来に返すのである。諸有とは迷妄それ自身にして、何等の価値を持たぬ者の事である。一切の眞実性を持たぬことである。

静かに教化の前にひれ伏して合掌念仏する時、一切の尊きもの、尊き文字は一々我が胸中より去りたもうてはないか。人はしばしば「眞実」なる文字を我が上に肯定しようとする。しかるに聖人にあつては二十九歳、吉水において眞実教にあいたまひし時、この二文字は聖人の胸中より羽生え飛んで、彼岸の如来の胸中に帰りたもうたのであつた。清浄なる二文字

も亦浄土に帰りたいもうて、如来の胸中において清浄光仏となりたまひ、歡喜の二文字も彼岸において歡喜光仏となりたまひ、智慧の二文字も彼岸に帰って智慧光仏となりたまひ。あれは、八正道は彼岸に帰って八道船となり、六波羅蜜も亦彼岸に帰って、如来の内容となりたまひぬ。尊き文字の幾百千は全て、深き内省自証を通して、悉く彼岸に帰りたいもうて如来の名号と転じたもうた。

かくて日本の国土には、七百年の古より、眞実、清浄、絶対、無量寿、光明、慈悲、智慧、道、徳、大善等々の尊き文字の一切は、聖人の自証を通して浄土に帰りたいもうたのであつた。しかしてあとに残りしものは「諸有衆生」の痛ましき文字であり、火宅無常、そらごと、たわごと、の文字のみとなつた。

しかるに何すれぞ、既に浄土に帰りたいもうた文字を、我が上に捕えおかんとするや。眞実なきに眞実ありと言ひ、眞実なりと誤信して、自らを誤り、他を傷つけることの甚だしき、国家社会の問題も家庭の騒々しさも、全てこれ眞実なきに眞実ありと主張するものによつておこさるるに非ずや。彼の額にしわして愚痴となり、暗の中心となる者の全ては、かかる人に非ずや。又あるいは、いささか意に満たざることあらば、劍をぬいて打ち斬ると云つた剛直なる人の行為の全ても亦、かかる浅くして単純なる自称善人によつて為されるには非ざるか。まことに、聖人と共に、念仏合掌して一切の尊き文字の全てを浄土の如来に帰すべきである。

人間の深くして尊き世界は、ただ内的世界の成就によつてのみ実現せられる。

彼岸より

まことに教主の教えは、絶対の權威をもつて、我に内へ内への自証をせまり、私の偽らざる相を知らしめたもう。しかして、その自証を通して前述の如く、一切の尊き文字は、彼岸⁵の法体の大行の内容となり、仏徳を説けるものと転ずるのである。聖人にあつては実に、全ての尊きものは現実より去つて、現実には「虚仮不実」「穢悪汚染」「無明海」等の痛ましき文字のみが残つたのであつた。しかしながら人生は決してそのままに放擲せられたのではない。聖人の胸はそのままに棄ておかれたのではない。

不思議なる哉、これ等尊き文字の一切が、浄土に帰つて悉く化して、南無阿弥陀仏の内容となりたまつた刹那、その名号は再び彼岸より現実人生に還来して、衆生の生命となりたまふのである。尊き文字の示す一の功德は、名号の内徳として撰在し、やがて衆生の聞信の一念を通して、衆生の上に回向せられるのであつた。されば、念仏の世界においては、我等は曾無一善唯知作悪の衆生である。であるまに、如来大善大功德の全的回向によつて、そのままが正定聚不退の菩薩たり得るのである。

我等はかかる内的世界、内的革命、内的自覚を称して宗教の世界と言ひ、浄土眞宗と言ひ、ついに信心、念仏の境と言ふのである。「諸有衆生、其の名号を聞いて信心歡喜し・・・」とは、実に絶対眞実教によつて衆生の上に開かるる、自覚の究竟的世界を言ふのである。

本願の世界と其成就文の世界

如来本願実現の形式

後や先、くり返し巻き返し、「諸有衆生、聞其名号」の文字について味讀してきた。諸有の衆生とは、実に生死流転の一切衆生のことであつた。何等の光を持たぬ業繫苦悩の衆生のこ

とであつた。しかるに、かかる相對差別、迷妄の有情も、其の名号を聞くことによつて、平等の信心成就し、歡喜して、救いを知るのである。

「其の名号」とは、十方恒沙の諸仏如来、諸菩薩衆において具体的なる名号のことであり、わけても教主世尊の生命たる本願名号のことであつた。

如来は必ず、その尊きみ光を現実人生に實現し顯現したもう。その如来本願の實現にあつては、必ず現実の人を招喚し求めて、その生死煩惱の上に回向實現したもうのである。

しかして、かかる如来本願の實現には、必ずその基本的形式なかるべからず、人は、必ず人の言葉を聞き、人に対して語り、聞く所を念ひ、聞く所を信じ、やがてその信念を行ずるものなるが故に、聞、信、稱の三事を抜きにしては、如来といえども本願を人生に實現したもうことは不可能である。身業によつて聞き、意業に信じ、口業に名号を稱す。聞、信、稱こそは、真に如来實現の三形式と云うべきである。

人、真実を聞くことなくば必ず虚偽邪惡を聞く。宗教の教説は、決して人生行路の参考意見に非ず、物知りを造る學問知識に非ず、單なる真理の表現に非ず、処世指針に非ず、直ちにこれ生命の問題であり、人格死活の問題であり、迷悟明暗、真実虚偽等の分岐点決定の根本第一義諦である。是を求め、是を聞き、是を信じ、これを行ぜずんば、真実究竟の自覺も生活も安心も成就せずと云う、我に於いて必然にして絶対なる真実教こそ淨土真宗である。

しかるに、かかる真実の教えは、必ず我等が之を聞くに先だつて、之に生き、之を説きたもう現実の人格が存在しなくてはならない。教主世尊、教主善知識が即ちそれである。しかして、かかる善知識は決して單なる道德律を説かず、學問を教えず、全一なる寿命の表現、即ち如来の名号を説きたまうのである。

まことに我等は、大地に生を享けて極めて多くのものを与えられる。しかれども、念仏絶對の道に生かされる時、今更に地上最高最大の賜物は實に、我に對したもう真実教の教主善知識であつたことに驚かざるを得ない。信心は唯、教主善知識より、名号の内容たる真実教を聞くことによつてのみ、成就するが故である。

善知識に値うとは

「聞其名号、信心歡喜」、其の名号を聞くということは、そのまま信心歡喜することである。信心歡喜は聞其名号によつてのみ生れる、いわゆる、聞即信の世界である。

私は先に、我に對する地上最高最大の賜は、教主善知識であると言つた。しかしそれは決して、ただ単に一人の崇拜すべき人格を見出したと言ふのではなく、實に真実の教えを説ける人格、如来と共なる人格を与えられたの謂である。世に教えを説く人に対して、ただその個人感情の上より、之を好き、之に甘え、ただその肉身に会うことを樂しみとする人あるならば、彼はついに真実なる宗教の世界に至り得ないであろう。人間的好惡を超えて、直ちにその生命にふれ、その説く所の教えに随順し歸命してのみ、はじめて教主は教主となるのである。これ世尊が、仏、法、僧の三宝を立てたまひし所以である。

教えに値うこと即ち善知識に値うことなるが故に、七百年の間隔ありつつ、二千五百年の時の隔りを持ちつつ、しかも直ちに現実の教主・本師に会い得るのである。彼の教主八十年の生涯は、彼の本師九十年の御苦勞は、今、念仏となつて我が胸中に凝集したもう。その八十年、九十年の念仏の御生涯なくば、我が胸中の大信心も亦あり得ないのである。我等は教主より二千五百年、本師より七百年の隔りありて、はじめて救われる存在なのである。山は彼方に聳え、彼を眺める眼はここにあり、若しこの隔りなくば、恐らくは、その御衣の裾を踏

むとも、その全貌を知る能わざる存在であろう。仏在世の時、人は世尊の真意を知らず、世尊の滅後に至って、その魂にふれ得たもの、大乘仏教徒ではなかったか。

「諸有の衆生、其の名号を聞きて信心歓喜せんこと」とは、本師の上に生きたまう如来、その生命である所の名号に触れ、信じよ、とのみことである。